

人參

泉鏡太郎

青空文庫

京師けいしの張廣號ちやうくわうがうは、人參にんじんの大問屋おほどんやで、聞きこえた老鋪しにせ。銀ぎ座んざで一番いちばん、と云いふづツしりしたものである。

あるひこと一日いちにちの事ことで、十八九ひとりにせうねんの一人ひとりの少年せうねん、馬うまに打乗うちのりり、荷鞍にぐらに着つけた皮袋かはぶくろに、銀貨ぎんくわをぎくくと鳴ならして來きて、店頭みせさきへ翻然ひらりと降おり、さて人參にんじんを買かはうと云いふ。

馬うまに銀袋ぎんたいを積つんで來きたくらゐ、人參にんじんの價値あたひは思おもふべしである。が、一寸ちよつと素人しろうとには相場さうばが分わからぬ。ひそかに心こゝろ覺おぼえに因よると、我朝わがてうにても以前いぜんから、孝行かうかうな娘むすめが苦界くがいに沈しづんで、浮うき川竹はたけの流ながれの身みと成なるのは、大概たいがい人參にんじん。で、高尾たかを、薄雲うすぐも、芳野よしのなど云いふ絶世ぜつせいの美人びじんの身代金みのしろきん、即すなはち人參にんじん一兩いちりやうの値あたひ

は、名高なだかい遊女おいらん一人いちにんに相當さうたうするのであるから、蓋けだし容易よういなわ

けのものではない。

何なんと！ 處ところで其その少年せうねんは、人參にんじん百ひやく兩りやうを買かはうと云いふ。

果はたせる哉かな、銀貨ぎんくわを馬うまに積つんで居ゐるから、金慣かねなれた旦那だんな、物ものに動どう

ぜぬ番頭ばんとう、生意氣盛なまいきざかりの小僧こぞうどもまで、ホツと云いつて目めを驚おどろか

して、天てんから降ふつて來きたやうに、低頭ていとう平身へいしんして、

「へえく、へえ。」

扱さて、芬ぶんと薰かりの高たかい抽斗ひきだしから、高尾たかを、薄雲うすぐもと云いふ一粒ひとつぶ

選えりの處ところを出だして、ずらりと並ならべて見みせると、件くだんの少年せうねん鷹揚おうやう

に視みて居ゐたが、

「お店みせの方かた。」

「はッ。」

「實は何です。私の主人と言ひますのが、身分柄にも似合はない、せゝッこましい人でしてね。恚うして買つて参ります品物が氣に入らないと、甚いんですぜ、そりや、踏んだり、蹴つたり、ポカ〜でさ。我又不善擇人參可否。此の通り、お銀に間違は無いんですから、何うでせう、一ツ人參を澤山持つて、一所に宿まで来て下さいませんか。主人に選らせりや、いさくさなし、私を助けるんです、何うでせう。」

一議に及ばず、旦那以爲然が、何分大枚の代物であるから、分別隨一と云ふ手代が、此の使を承る。と旦那も十分念を入れて、途中よく氣をつけて、他人には指もさゝせる

な。これだけの人參、一人觸つて一舐めしても大抵な病

人は助かる。で、それだけ代物が減る、合點か。

もう、其處等に如才はござりません、とお手代。こゝで荷鞍

へ、銀袋と人參の大包を振分けに、少年がゆたりと乗

り、手代は、裾短な羽織の紐をしやんと構へて、空高き長

安の大都を行く。

やがて東華門に至ると、こゝに、一大旅店、築地ホテル

と言ふ構へがある。主人は此處に、と少年の導くまゝに、

階子を上つて、其の手代は二階の一室、表通りの見晴と

云ふのへ通る。

他愛なく頭が下つたと云ふのは、中年の一個美髯の紳士、眉

におのづから品位のあるのが、
 然と頤の其の髻を扱いて居た。

寶石を鏤めた藍の頭巾で、
 悠

「お手代、大儀ぢや。」

「はッ、初めましてお目通りを仕ります。へえ、今度はまた格

別の御注文仰せつけられました、難有い仕合せにござりま

す。へえ、へえ、早速これへ持参いたしました人參、一應

御覽下さりますやう、へえ。」

以前の少年も手傳つて、これから包を解いて、人參を卓

子一杯に積上げる。異香室内に満つ——で、尊さが思遣

られる。

處へ、忽ち、門外、からくと車の音、ヒ、ンと馬の嘶く

こゑ
聲。

まひるころ
正午頃の大ホテル、秋冷かに寂とした中へ、此の騷
々しき。病人の主人、フト窓から下を覗くと、急に眉を

ひそ
聳めて、

「童子。」

と少年を呼んだのは豪いが、些と慌しさうな言語で、

「これ、何が来た。それ、な、病氣ぢやに因つてお目には懸ら
れぬと言ふのぢや。」

かしこま
「畏りました。」

トンくと階子を靴で、靜に、……しかし少年は急いで下り
る。

主人しゅじんこゑを密ひそめて、手代てだいに、

「いや、些ちと其そのな、商しやうげふ業ぎやうの取引上とりひきじやう、俺わしに貸金かしきんのある

ものが參まゐつたで。恥はづかしいわ、は、は。」

と笑わらつて、

「二階にかいへ上あがらせては些ちと面倒めんたう、と云いふのが、恚かうして人參にんじんを

買かふ處ところを見みられると、都合つがふが悪わるいので、金子かねを渡わたさぬわけに行いか

ぬぢや。……は、は、大目おほめに見みやれさ。」と仰向あふむけに椅子いすに凭よる。

「いえ、もう、誰方どなたさま様さまも其處そこがお懸引かけひきでいらつしやります、

へえ。」と眞面目まじめで居ゐる。

少年せうねんが引返ひきかへした。が、大おほいに弱よわつた顔かほをした、「内證ないしやうで

婦人ふじんなどお戯たはむれで、それで座敷ざしきへ通とほせぬのであらう。其その儀ぎなら

尚なほの事こと、斷たつてとおつしやる。旅りよてん店わかの若しうい衆おしかへも押返おしかへすやうにお
留とめ申まをしては居をりますが、手てあし足を掉ふつてお肯きゝい入れなく、靴くつで蹴けと飛と
ばしていらつしやいます。」

「困こまつたの。」

と爰こゝに於おいて、色いろを變かへて、手代てだいに向むかひ、一いちばい倍こゝろ低聲こゝろで、

「些ちと縁えんつゞ續つゞきのものだけに、益ます々く以もつて然さう捻ねぢられては難むづ
かしい。……何なにしろ此處こゝへ通とほしては成ならぬで。俺わしが下室したへ行いつて
逢あつて來こよう。が、つむじ曲まがりぢや、強たつて上あがつて來こぬとも限かぎら
ぬ。念ねんのため、此處こゝに、竹行たけがうり行李りがある。ソレ、錠ぢやうも下おりるわ。
早はやく其その人參にんじんを中なかへ入いれて、お主ぬし、天川あまがはや屋やと云いふ處ところで、のつ
しと腰こしを掛かけて番ばんをして居みてくれい。宜いいか、宜いいかな。」

で、病^{びやうにん}人とあつて、蹠^{よろ}跟^くと樓^{にかい}を下^{おり}る。

「旦那^{だんな}、お危^{あぶな}うござります。」と少年^{せうねん}は其^その後^{うしろ}へ、腰^{こし}を抱^{いだ}くやうな手^てつきで従^{したが}ふ。

戸外^{おもて}が近い^{ちか}から、二階^{にかい}に残^{のこ}つた手代^{てだい}の耳^{みみ}にもよく聞^きえる。一つふたつ下室^{した}で、言葉^{ことば}を交^{かは}した、と思^{おも}ふと、怒鳴^{どな}る、喚^{わめ}く、果^{はて}は、どたくの取組^{とつくみ}あひ。何處^{どこ}へなだれ懸^かつたやら、がらん、がらん、と云^いふ響^{ひび}き。

やがて、ホテルは寂然^{しん}として、遠^{とほ}くで馬^{うま}の嘶^{いな}くのが聞^きえる。窓^{まど}の外^{そと}を赤蜻蛉^{あかとんぼ}。

竹行李^{たけがうり}に腰^{こし}を掛^かけて、端坐^{たんざ}した人參^{にんじん}お手代^{てだい}、端坐^{たんざ}だけに尚^なほ間^まが抜^ぬける。

「はてな。」とはじめて氣が着いて、主人が渡して行つた鍵をガツチリ、狼狽眼うろたへまなこで開いて見ると、這は如何こいかに。箱の底から、階下の廊下らうかが見通しみとおであつた。行李は、元來ぐわんらいの底なしで、今のどたばたの音おとに紛まぎれて、見事みごと、天井てんじやうを切つて、人參にんじんを抜いたもの。

いや、其その時ときの手代てだいの様子やうすが、井戸いどに落おとした音おとのやうで、ポカンとしたものであつた、と云いふ。さて、油斷ゆだんは成ならぬ世よの中なか。次手ついでにとぼけたのがある。江戸えどの掏兒すりは、人ひとの下駄げたを脱ぬがすと聞きくが、唐人たうじんだけに穿はいて居ゐる靴くつを脱ぬがされて、剩あまつさへ屋根やねへ上げられた、と云いふのが一つ。

むかし唐土もろこし長安ちやうあんのハイカラ、新あたしい買かひたての靴くつで、キユ

ツ／＼などとやり、嬉しさに、爪先を見て、ニヤ／＼と町を通る。

一人づいと行逢ひ、袖を捲いて、長く揖し、靴どのが手を、ひしと握つて、

「やア、お珍しい。何うも、しばらく、何とも御不沙汰、大將何うです、御景氣は。」

と立續ける。靴を着けたるもの、固より見も知らぬ男であるから、ものをも言はず呆れて立つたは其の筈で。

揖するもの、くわつと成つて、

「笑かしやがらあ。新らしい靴を穿いたと思つて、異う俺つ達を他人にしやがる。へん、止してくんねえ。」

と言ふが否や、靴どのが被つた帽子を引捻つて取つたと思ふと、片側町の瓦屋根の上へ、スポンと投げて、
 「状あ見やがれ。」と後をも見ず、肩を怒らして、肱を張つて、
 すたく去る。

新靴は、きよとんとして、

「はア、酔漢や。」と呟いて、變な顔して屋根を見て居る。此の姿が、例の唐人だけに面白い。
 處へ又、通りかゝつたものがある。

「もし、飛んだ目にお逢ひなさいましたね。今の奴は何て悪戯をするんだらう、途法もない。いや、しかし、烈しい日中、尊頭。」

と記かいてある。(尊そんとう頭)は言いひ得えて妙めうなり。

「尊そんとう頭たまが堪たりますまい。何なぜ故や屋ね根ねへお上あがんなすつてお帽ぼうし子しをお取とりなさいません。」

「ぢやてて、貴あんた方たはん、梯はしご子こがおへんよつて、どないにもあきまへん。」

と言いふ。

其その人ひと曰いはく、

「それだつて、小原を女はらめが賣うりに來くるのを待まつて居あられもしますま
い。可ようがす、肩かたをお貸かし申ませう。これへ乗のつて、廂ひさしへかゝ
つて、大屋おほや根ねへお上のぼんなさい。」
くつをつくるものかんしや
着靴くつ者もの感かん謝しや。

「おい来た。」と氣輕きがるに踞しゃがむ、其その男をとこの肩かたへ、づかと遣やると、忽たちまち怒おこつた。

「串じようだん 戲あたらぢやない。汝おめえ、靴くつが惜をしけりや、俺おれだつて衣服きものが惜をしいや。

いくら新あたしい靴くつだつて泥どろがついてら、氣きをつけねえか。」と、けぐめを啖くらはず。

着くつ靴をつくるもの者の慙ざん謝しや、とある。これは慙ざん謝しやは當あたり然まへである。

其處そこで薄うす汚よごれた襪したぐつに成なつて、肩かたから廂ひさしへ、大屋根おほやねへ這は上あがつて、二百十日にひやくとをかと云いふ形かたちで、やつとこな、と帽子ぼうしを搥つかむと、下したの奴やつは甜瓜まくはかじりに靴くつを搥つかんで、一目散いちもくさん。人込ひとごみの中なかへまぎれて候さくらふ。

明治四十四年五月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「人參《にんじん》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人參
泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>